

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

（近刊著書紹介）小松美彦『生権力の歴史 脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐる』『生を肯定するいのちの弁別にあらがうために』

| | |
|-----|---|
| 著者 | 小松 美彦 |
| 雑誌名 | The Basis : 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 紀要 |
| 号 | 4 |
| ページ | 237-238 |
| 発行年 | 2014-03-01 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1419/00000529/ |

(近刊著書紹介)

『生権力の歴史——脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐる』

(小松美彦、青土社、2012 年 11 月刊)

『生を肯定する——いのちの弁別にあらがうために』

(小松美彦、青土社、2013 年 8 月刊)

小松 美彦

大学院生時代からの私の主専攻は科学史である。具体的には、西欧近代の医学や科学において生や死がいかに捉えられてきたのか、その歴史的検討が課題である。ただし、歴史研究にあっては、そもそも現代に対していかなる問題意識をもつかが要であり、そして当の問題意識から歴史に問いかけることで、歴史ははじめて応答し生きたものになる、と考えてもきた。その契機は、中学 1 年生のときに教育実習の K 先生に勧められた E.H. カー『歴史とは何か』(岩波新書、1962 年)の衝撃であった。客観的な歴史的事実などなく、常に主観を通してのそれがあるのみで、主観とはすなわち各人の問題意識だというのである。そこで 30 歳代半ばから、専攻の死生論史を近年の生命倫理問題と結びつけることを試みてきた所存である。標記の二書は、かような私なりの暫定的な総決算にほかならない。

1. もとより生命倫理とは、1970 年前後に米国で誕生した知的営為である。原語は Bioethics。日本には 1980 年頃から輸入され、生命倫理(学)と直訳されるか、バイオエシックスと片仮名表記され、今日では一つの学問分野および制度となっている。このような生命倫理は、1960 年代の米国における社会と文化の地殻変動の中から生まれた。種々の権利を掲げた市民運動の高揚(消費者運動・公民権運動・患者の権利運動・ウーマンリヴ)、避妊や中絶にまつわるキリスト教の倫理改革、環境破壊や人口爆発に対する危機意識、人工透析や臓器移植などの先端医療の登場などの中からである。それゆえ、当初はさまざまな批判的な意識や思想に満ちていた。Bioethics が新規の学問として提唱された 1970 年頃もそうであった。

だが、ほどなく生命倫理は、対象を医療とバイオテクノロジーに狭め、実践的な問題解決型のものへと変容する。つまり、人体実験や遺伝子操作など、影響が社会全体に及ぶと考えられるものについては、法やガイドラインを策定して実施基準を設け、個々人の問題にとどまると判断されるものに関しては、「自己決定権」(自律)をはじめとする四原則(他に、無加害、善行、正義)を立てて、それらをもっぱら当てはめる方向へと収斂した。かくして、生命倫理は、新規技術の導入を大前提として、その条件整備に腐心する装置と化し、批判的な意識や思想を脱色されたこの変容後の生命倫理が 80 年代の日本に輸入されたのである。

省みれば、以上のような生命倫理には、いたって稀薄であるか全く欠落している重要な視点がいくつもあるように思われる。①生命と死そのものを探究する「原理的な視点」、②先端医療やバイオテクノロジーがもたらす将来世界を見せる「文明論的視点」、③問題の検討に

際して過去からの流れを反省的に辿る「歴史的視点」、④当該問題と経済政策との絡みを解きほぐす「経済批判の視点」、⑤科学的とされる理論や技術の妥当性を検証する「メタ科学の視点」、⑥死生をめぐる問題を権力論の切り口から剖検する「生権力の視点」、これらである。

一般的には馴染みの薄い「生権力」とは、M. フーコーが『性の歴史Ⅰ——知への意志』(1976)において把握した近代的な権力の在りようである。20世紀後半を代表するこのフランスの思想家によれば、西欧では17～18世紀を境に、権力の形態は人々を殺すものから生かすものへと重心を移した。すなわち、権力は人々を、学校や病院や刑務所などによって個人として、また人口統制や公衆衛生によって集団として、訓育し管理することに重きを置くようになった。このように二重の形で加護の手を差しのべ、人々を丁重に飼育する権力形態が、生権力にほかならない。米国型の生命倫理では、この観点からの考察も見受けられないのである。

2. 概して以上のような発想から、私は現代の死生問題を考察してきた。それが私にとっての科学史と生命倫理との融合なのであり、標記の二著はその意味での集成なのである。

このうち『生権力の歴史』は、前述の六種の視点から、主に脳死・臓器移植、安楽死・尊厳死、そして受精卵の研究・産業利用について多角的に論じた一書である。いったいなぜ、移植臓器の提供者は健常者ではなく脳死者なのか、安楽死・尊厳死の対象者は健常者ではなく植物状態などの患者なのか、健常な胎児や乳児や成人には許されぬ破壊行為が受精後14日目までの胚には許されるのか、さらには、ナチスにおいて大量殺戮の対象となったのが、健常者ではなく知的障害者や精神障害者だったのはなぜか、ドイツ民族ではなくユダヤ民族であったのはなぜか、議論全体に通底する「問題意識」は、従来は省みられることがまずなかったこの謎の解明である。かくて、最終的に照準を合わせたのが生権力にほかならない。

しかしながら、先のフーコーも、その生権力論の批判的継承者にして現在の思想界の二大巨峰と思しき G. アガンベンと R. エスボジトも、かかる謎の脇をかすめたにすぎないと思われる。つまり管見によれば、生権力の核心とは、「生きるに値する者」(健常者など)と「生きるに値しない者」(脳死者など)との弁別にある。なぜなら、生権力は万人にあまねく手厚い庇護の手を差しのべるのではなく、手を差しのべる者と差しのべない者とを事前に二分しているからである。さらに掘り下げるなら、この弁別を可能にする装置がそれとなくどこかに潜んでおり、まさにこれこそが生権力の核心中の核心ではないか。こうして辿り着いたのが、おそらくは些かも疑われることがなかった「人間の尊厳」なる至高の概念である。

そこで、同書の最終章では、「人間の尊厳」なる言葉を歴史上はじめて書名に冠したとされるルネサンス期の人文学者ジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラの所論を切開し、そのうえで、デカルト、パスカル、ベーコン、ロック、デイドロ、ルソー、カント、ハイデガー、はてはヒトラーその人等々をピコの後裔と見なし、「人間の尊厳」をめぐる思想史を跡づけた。そしてさらには、ナチスの蛮行を総括したはずのボン憲法や世界人権宣言などが、ひいては生命倫理それ自体が、実はピコを端緒としたナチスと同じ土壌から出来たことを論じた。このような歴史的検討を通じて、かかる「謎」の解明を図ったのである。

翻って、もう一方の著書『生を肯定する』は、以上の所説を中心として、6名の論客(哲学・倫理学者3名、社会学者1名、医師・医学者2名)に批判を仰いだ対論集である。